

【翻訳】

## 「愛に生き、生を愛せ」(2)

——クレメンス・ブレンターノとゾフィー・メローの往復書簡——

## 序 論

ダグマール・フォン・ゲルスドルフ

中 野 隆 正 訳

## 3 新たな開始（1802年12月—1803年5月）

わたしも、あなたの肖像画を持っていて、  
 ときどき見ていることは御存知ですね。  
 言ってください、その絵を描いた人  
 わたしが敬わねばならない人は誰か？  
 その人はそこで寛大にも  
 才能だけを示し、魔神を隠しました。

クレメンス・ブレンターノに、ゾフィー・メロー 1802年

春は翼を動かし  
 大地はあこがれる  
 大地は何も戻すことはできない  
 あなた以外には、あなたという善良な女以外には

ミナ・ライヒェンバッハやグリタ・フントハウゼンへの一時的な愛にもかかわらず、かれにカロリーネ・フォン・ギュンデローデ（1780—1806）を近づけようというベッティーネの努力にもかかわらず、クレメンス・ブレンターノは終始ゾフィー・メローを忘れることができなかった。彼は勉学の地を変え1801年5月にアウグスト・ヴィンケルマンとゲッチングゲンへいった。そこで彼はゲーテを訪問したとき、生涯の友で、のちに妹ベッティーネの夫になったアヒム・フォン・アルニムと知りあう。ゲーテによって公示された懸賞募集に、かれは陰謀をあつかった作品「ボンセ・デ・レオン」を書き、出版業者ヴィルマンズにせきたてられて「ゴドヴィ」の第2部を書き終えた。ゾフィー・メローはその小説のなかで「美しく賢い、自由な女」、モリー・ホーデフィールドという人物に描かれている。最後の部分を執筆中にブレンターノの具合が悪くなった。仕事を進めるのは骨が折れた。サヴィニーに彼は書いている。「わたしはとても疲れて空しい、楽しくないので、わたしの小説のまずい結末を引っ張っていけない」——「今わたしは書きなぐり高貴な感情を口にすべきだ。とても悲しいし、楽しくない——」

彼の文学は行き詰まる。彼はゾフィーがいらないのに気付く。「メロー以外この世に愛する女はいない。彼女の胸を通して、カフカズ山脈から幸せなアラビヤを越えてさらに遠くがみえる。……………あい

かわらず前のように、この女をわたしは愛している。この愛に身を焼きつくすのに、わたしは値しないとはいえ、彼女はそれに値するのだ。」こう妹のグンダに書いている。そしてサヴィニーには「メローが好きになってから、わたしの世界が崩壊するのをいつも恐れていました。」

再会の正当性をゾフィーに納得させることだけが、彼の望みだった。「手紙を書いてくれ、ゾフィー、お願いだ、あなたが書いてくれないと、わたしはほんとに病気になる。すでに病気だが、もう長いことそうだ。」(1801年)しかし彼女はそれに注意ぶかく反応する。やむをえず共通の友マエール(1772-1812)が同席しているところで会うために、彼がワイマールに姿を見せたとき、彼女は再会そのものを断ってしまう。彼女の冷たい拒絶は、フリードリッヒ・シュレーゲルや毒舌家のドロテア・ファイトのたえまない陰謀によって、決められたものだった。

ブレンターノが年の変わり目にいかに辱めと哀しみを体験したか、1802年1月2日のヴィンケルマン宛の手紙に書いている。「わたしはマエールのパーティーで、ただ二言三言、どうでもよい言葉を許してほしいと彼女にたのんだ。晩に催される『ヨン』で初めて公に会いたくないので、まったくむとんじやくに。彼女はそれを望まなかった。……………こうしてわたしはいいしれぬ苦痛で、劇場のなかに立っていた。そして彼女が立ち去ったとき、わたしは彼女にたびたび出会うことを夢見た。そして出てくる人々の混雑のなかで、まだ会ったことのない天使のように心からの愛をこめて数秒彼女をしっかりとわたしの腕にだきしめた。コツェブエ氏の馬車の車輪がわたしの心臓をのりこえていったら、ほんとうにわたしは卑劣にして、かつ幸せに命を落としていただろう。そうゆうことだ。」

1802年に彼女の手紙はこなかった。クレメンスは孤独で不幸だった。デュッセルドルフで彼は、1802年秋にジングシュピール「楽しき楽士たち」を書き、ある美しい女優によってゾフィーを思いだしていた。その地から彼は弟のクリスチャンに次のような手紙を書いた。「どんなことも、わたしのなかにあるメローの思い出を消すことはできない。神はご存知だ。わたしが誠実に愛し、誠実に楽しみも哀しみもなく死ぬことを。おまえが彼女に会ったら、よく見て観察してくれ。彼女はわたしの生涯のただ一つの生きている地点だ。そこでわたしの人生は終わったのだ。」

ところでこれは、ブレンターノ兄弟の互いの感動的な忠誠を証明するものであるが、すでにグンダがクレメンスのためにとりなしたあとで、今やクリスチャンがそれに加わった。クリスチャンは1802年12月10日、長い懇願する手紙をゾフィー・メローに出している。

「奥さん、あなたに手紙をさしあげるのは、兄クレメンスの指図によるものではありません。沈着で謙虚であるようにとだけ、彼はわたしを諫めています。……………」

真理が、奥さん、ある途方もない仮借ない真理が、彼の性格の神聖な基礎をつくっています。その真理は彼のなかで一瞬の感情のなかにまであらわれて来、彼の心のうちの計り知れない善良さとあいまって、ある美しい省察になっています。真理をそこまで追求しない人、彼の行為と存在の調和をここでもとめず、ここで見出さない人、その人は真理を誤って判断し、ブレンターノを誤って判断するのです。その人は彼の言葉の矛盾を解決することはできないし、その人はブレンターノを無節操とか軽薄だとみなすことによって、好んで、容易にこの努力を免れています。しかしそうする人は間違っています。というのは、彼の性格はむしろ非常にしっかりと完璧で美しいので、世間にとって彼はあまりにも繊細で、あまりにも計り知れないのです。……………」

ライン河畔のサヴィニーのサロンに出席する旅から、彼は美術館と劇場の一座に拘束されるデュッセ

ルドルフにもどってきました。……………この一座のある女優について、彼はわたしにつぎのように書いています。『この劇場でとくにわたしの心をとらえたのは、ある女優の姿と、彼女のあらゆる物腰です。彼女は爪先まですっかりメローに似ていて、みごとに歌い演じます。わたしは彼女のなかにあるあの天使を相変わらず愛しています。』……………

それ以上わたしは言いません。あなたが望んでいたのとは、かなりちがった風に彼のことをわたしが話したとしたら、許してください。罪はわたしにあります。そしてもしわたしが彼のことを正確に話さなかったとしても、彼がわたしを赦しますように。彼が落ち着きを、彼の生活をふたたび獲得するかどうか、彼が神の意志にしたがってなるべきであり、なることができるものになるかどうか、彼がなんらかの方法でこれらすべてのものにまだなりうるかどうか、それに決定をくだすには、奥さん、わたしはあまりにも若く、そしてあまりにも愚かです。

敬 具

頓首再拝                      クリスチャン・ブレンターノ」

あれだけかたくななゾフィー・メローも、今やついにクレメンス自身に返事をだすことに決めた。1802年12月12日の手紙は、彼女のさいしょの反応である。同時にその手紙では彼の人柄が明らかにされている。彼女はクレメンスの性格に、「天才」と「魔神」が魅惑的に混ざりあって分かちがたく結びついているのを見る。彼女の手紙は、あたらしい接触を始めるきっかけである。

なぜなら今や、クレメンスをこれ以上ひき止められないからである。ぎっしりつめて書かれた手紙の洪水のなかで、懇願、保証、非難、告白の奔流のなかで——ちょうど四つ折り版19ページの1803年1月10日の最初の手紙——彼はあらためて彼女の歓待、好意、愛をかちとる。

信じられないことがおこった。半分冗談で、力という言葉で、クレメンスは自分の揺るがない感情について、彼女を納得させることができたのである。そして彼女は彼についていく。ユーモアにあふれ、超然と、有めながら。彼女の手紙は最後に書いている。「わたしはあなたにお逢いしたい——あなたは私にとって新しい知人といっていいでしょう。あなたを知らないのです、どう思うか、どうしてわかるでしょう？」これをクレメンスは旅への誘いだとおもう。彼はすぐ彼女にしたがう。フランクフルトに別れを告げることなく、彼はワイマールの「愛する彼女のもとに、失ってふたたび見つけた女のもとへ」と急ぐ。1803年5月14日、ほぼ3年の別離ののちに、ゾフィーとクレメンスはふたたび逢った。

クレメンスは哲学の教授フリースのところに住む。フリースはのちに彼の仲介でハイデルベルクに招かれた。サヴィニーに彼は次のように書いている。「数日前からわたしの幸福は固まったように思われます。ゾフィーは日毎に愛情に満ち、やさしく、素朴になります。そしてある時はわたしを愛し、ある時はたしかにけっして愛したことがなかったようになります。わたしは今、毎日彼女に歌を書いています。……………毎日わたしは彼女に逢い、そしてわたしたちは心から親しんでいます。」

#### 4 再 会（1803年5月—8月）

わかってくれ、ねえ君、わかってくれ  
わたしは君に別れを告げる

君はわたしの心を破った  
 だからそれはもう鼓動できない、  
 君にふたたび逢うまでは、

ゾフィー・メローに、 クレメンス・ブレンターノ 1803年

それにつづくワイマールとイエーナでの何ヵ月かは、再会の幸福に満ちあふれていた。ゾフィーは日記に書いている。「5月14日。心の春。大きな変化。花、愛、礼拝、生活。」クレメンスはふたたび詩をつくる。ゾフィーにあてた愛の詩は、彼が妹のベッティーネに書き写して、ベッティーネがそれを「春の花輪」のなかでクレメンスとの往復書簡として、1844年公表したことにより保存されている。——「君がわたしを慰めるつもりなら」という詩で彼はつぎのように書いている。「愛するベッティーネ、この最後の小さな詩は、羽を灯火で燃やし、シャンパングラスに沈んでしまったちいさな蝶を……ゾフィーが救おうとしたので生まれた。——ああベッティーネ！この詩は光りながらあちこち飛んであるく小さなホタルのようだ。」

ワイマールからクレメンスは、友のアルニムにふたたび見出した幸福をのべている。率直に彼は、はじめ彼とゾフィーはおたがいによそよそしく対立していたと告白している。「しかしわたしは、神々とこの地上では子供達だけが純粋に保ちうる善良さ、天真爛漫さ、人間味を彼女のなかにみいだしました。神や世間にみすてられ、罵倒され、貧しいというかぎりない不幸のあとで、人を愛する軽やかな、陽気な心をもっているというこの人柄は、とてもすばらしいものではないでしょうか？……わたしは以前彼女を愛していたように、彼女はわたしを愛しています。そしてわたしが詩人の目でみたあの人の、彼女はかぎりなく似ているようにみえる、ゆいつの女性です。」「彼女は自分を無にしてわたしを愛してくれるのだが、彼女がわたしのなかにみいだすそんな魅力が、どこにあるのかわからない。」ここで彼は誇張している。というのは、たとえゾフィーがだんだんと彼に引きつけられたとしても、相変わらずひじょうに控え目だったので、自分と親しくするようにと、彼は彼女に催促し、せがみ、懇願しなければならなかったからである。「ああゾフィー！わたしが君をどんなに望んでいるか知っていたら。わかってくれ、わたしはきみが泉であることを望んでいる。わたしは君のゆくてに立ちはだかるだろう。そして君はわたしを乗り越えていくだろう。そのときわたしは冷えきってしまうだろう。君はわたしによって弱められはしないだろう。」——「今夜わたしは君を腕に抱き、接吻し、たのしませ、君の生活を甘美なものにする。」……そしてもっと激しく、「君がどんな道を選んでも、君はわたしの女であることを要求する。」（1803年7月）

彼を驚かせたのは、二度と結婚はしないという、彼女の決心だった。ゾフィー・メローは、また束縛されることを望まなかった。何年かの自由な女流作家の生活に満足していた彼女は、いまやその自由を守る。随筆「青年と愛」のなかで詳しく述べているように、彼女にとって結婚は、つぎのようなことを意味した。とにかく結婚は人類のより良い時代、理想的だと思われた「黄金時代」には必要のない空虚な外面的形式にすぎない、というのは恋人同士は、司祭や市民の道德通念のささえがなくても親しむことができるからである。しかし彼女は喜んでクレメンスとマールブルクへ引っ越しをしようとする。

「親愛なるサヴィニー！わたしはここで、ゾフィー・メローとの結婚をあなたに御報告する………というわけではありません。私達は昨晚月明かりの林檎の木の下で、結婚しないことを決めました。

しかしわたしたちはおたがいに本当に愛し合っています。そしてわたしたちはその愛を親しい友人関係に——つまり純潔な関係——に限るつもりです。」（1803年7月）

そしてアルニムに「もうこの冬、彼女はマールブルクでわたしのそばに住みます。6週間彼女を持っています。わたしたちは結婚することで意見が一致していません。彼女はわたしを拘束しないために、結婚をのぞみません。わたしは自分を解放するために、結婚をのぞんでいます。というのは静寂、世間からの隠遁、簡素というのが、わたしの心からののぞみだからです。」

さしあたり、夏の何ヵ月か彼女の近くにて、日々彼女に会えるというしあわせで、クレメンスは自由な共同生活の見通しとしては満足する。彼は書き、読み、演奏し、ゾフィーと散歩する。7月初めに彼はラオホシュテートにあらしく開かれた劇場で、ゲーテの「自然の娘」（オイゲニー）をみる。この作品は1803年4月2日に初演されていた。ラオホシュテートにはシラーも7月14日まで滞在していた。詩作上の思いつきで彼の頭は一杯になる。彼は「ロマンチックな喜劇」を計画する。彼らはイエーナへ行き、何年かまえに一緒にいたところへ行く。充たされた夢、生きつづけた愛。

ゾフィーの女友達シャルロッテ・フォン・アーレフェルトは、イエーナとワイマールにおけるクレメンスの滞在を、目にみえるようにいきいきと報告している。「彼がはじめてわたしの部屋にはいったとき、そこにあるほんとうに美しい絨毯にうっとりしていたのを思い出します。きわめてあざやかな色にかがやくワニ、トカゲ、クジャク、ゴクラク鳥、花といったものが、ヘビといっしょにそこでは色さまざまに溶け合って織りこまれていました。そしてそれが彼の創作力を刺激したので、彼はこれらすべての対象をすぐ一種の詩にしました。わたしがそれを紙に書き留めることを許されなかったのを、とても残念におもいます。つづいて彼は平伏し、そして足で踏みつけたということで、これらすべての被造物にゆるしを乞いました。」

夕方彼は彼女のサロンに参加する。そのさい彼のウイットに耐えられなかった、フリードリッヒ・テークとこっけいな論争になった。「両者のあいだに起こったすべてのことを、礼儀作法の限度内に、平穩におさめるために、何はさておいても、ゾフィー・メロー特有の愛嬌と思いやりが必要だった。

ときどき、わたしたちは野外の月あかりのなかを歩きました。そのときクレメンスはギターをもち、そこに起こったあらゆる楽しみごとをすぐ詩にし、ためらわずに歌いました。また、わたしたちは住民の祭りや田舎のダンスにいっしょにまぎれこみました。……そして全員が彼のまわりに押し寄せ、ほんとうに喜んで彼のいうことに耳をかたむけました。ときどき彼が作ったとても面白い童話をわたしたちに話したので、ひとびとは何時間も彼の話しに耳をかたむけていました。」

フォン・アーレフェルト夫人はさらに、ゾフィーが化粧をするとクレメンスは我慢できず、彼女が馬に乗ると——彼は乗馬を女らしくないと思っていたので——腹をたてた、その結果あるときははげしい口論になった、と報告している。そのあと「彼女は、とてもおだやかに優しく彼にふるまい、彼は燃えるような眼差しで彼女をじっと見つめた。」——その夜、彼は彼女を家へつれていった。そして翌日「彼は朝の5時まで彼女のそばにいて、彼女の好意をたたえることを止めることはできなかった。」と語った。

このあと、わたしがゾフィーひとりと話しをし、彼女がすべてをわたしに語ったとき、つぎのようなことを告白した。彼が明るい朝になるまで彼女の傍にいたと、そうしているあいだ、それを後悔するなんてありえなかったと。なぜなら、この夜は彼女の将来全体にとって決定的だったからです。彼は彼女

と厳粛に婚約した。それにたいして彼女は、完全に彼にしたがうことを誓った。しかしこういったあらゆる出来事にショックを受けたので、彼女は病気になり、二三日出歩くことができなかった。そのとき彼はとてもやさしく十分に、彼女の世話をした。」

フォン・アーレフェルト夫人が報告してるように、彼は例の彫刻家と「公然たる舌戦をくりひろげていた」が、「ティークは彼の頭部を大変うつくしいと思ったので、彫塑すると言い張った。それはクレメンスに<sup>へつち</sup>諂っているようにみえた。クレメンスはすぐに適当に座ると申し出た。彼が機敏であることを考えれば、そんなことは、ほとんど期待できなかった。彼はゾフィーとわたしに、モデルになるとき訪ねてくるようにとたのんだ。」

ティークの作った胸像は傑作になった。「君がわたしを愛して新しいわたしを産みだすように、ティークは君の心からわたしを捉えたのだ。」ゾフィーはそれにもとづいてソネットをつくった。それを彼女は「さまざまな一連の小さな著作」のなかで、枢密院顧問官夫人ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュに献上して1805年公表している。

なんとすばらしい像をその芸術家はここで作ったことか？  
 どんなおだやかな風土からそれは産みだされたのか？  
 このやさしい唇は永遠に沈黙しているので、  
 彼の名を呼ぶ銘はないのか？

目には高みへの切なる願いが生き、  
 額には感動があらわれ、  
 ただ美しい巻き毛によって誉れは飾られ  
 まだ栄冠に甘んじてはいない。

それは詩人である。彼の唇は愛につつまれ  
 すばらしい幸せな人生を誇示する。  
 ロマン스가彼に瞑想的な眼差しを与えた。

そして彼の頬には諧謔がおどけて宿っている。  
 いつかは彼の名に名声が与えられよう  
 彼の頭を栄冠で飾って！

1803年8月22日ゾフィーはフォン・アーレフェルト夫人とドレスデンへ旅をする。別れの日クレメンスが<sup>うた</sup>詩う。

喜びにあふれず、二人は  
 悲しみに引き裂かれる。  
 ああ再会のはるかに遠く  
 そして別れはちかづく。

彼自身はマールブルクへ帰ることをのぞむ。アルニムに彼は書いている。「それゆえ、数日でわたしはマールブルクへ帰ることに決めました。そしてゾフィーもまもなくそこへ引っ越し、そこで生活し、愛し、働くでしょう。……………アルニム、この女はだれよりも純真で敬虔です。彼女の愛らしさ、生活にたいする勇気、心底からの善良さといったものが無数にあるので、彼女は永遠にかがやいているだろう、けっして凋みはしない。こうしてわたしは、またゲーテが切にのぞんでいた自然のままの物を、まもなくすべて手にするだろう！」

10行の別れの詩は一枚の紙に書かれている。その紙にクレメンスは最初「ドルンブルクの別れ」という題名のゾフィー・メローの詩を書き写し、それから自分の詩をその下にいれた。

こうしてわたしは君のあらゆる喜びと共に生きるだろう、  
君は至福に充ちた甘美な谷間である、  
君のあらゆる悩みとともに、  
君という甘美な谷間のもとを、  
わたしは長い間離れるのだ。

マールブルクから彼はアルニムに書いている。「わたしの幸せを望み、わたしを愛してくれ、というのは彼女をめぐるわたしのあの奇妙な戦いは解決したからである。そしてわたしは彼女を知っているので、おちついて言える。わたしはワインベルクで仕事については、あまりにも多くのものを得たと。というのは、彼女が全体としてわたしにふさわしく、好意と愛にあふれているからである。」

(続く)